

教養教育と数学

八 木 克 巳

京都府立医科大学数学教室

本校を定年で去るにあたり、教養教育について考えてきたことを少し述べたいと思います。

野生の動物の成長を考えてみますと、多くは誕生から歩き始めるまでに、そう時間や日数はかからないようです。一方、ひとは歩き始めるのにほぼ1年ほどの日数を要します。進化がすすむに連れて、1人前になるのには時間がかかる傾向があるようです。また、人においては、武士の子供が元服をするのは14才から16才ぐらいであったのが、今では成人は20才からになっています。また昔の教育制度では義務教育は小学校の6年間であったのが、戦後では9年間になり、いまではほとんどが高校まで進学するようになってきました。かくも、社会が成熟するに連れて成人になるのには手間暇がかかるようです。以前は、高等教育は大学が担っていたのが、教育の大衆化がすすみ、高等教育は大学院に移行してきました。国もそれを見越して、大学における大学院重点化を政策としてきました。医学の教育においても、6年間の学部での教育のあと、2年間の卒後の研修医教育が最近始まりました。この新しい制度には種々の意図があるんでしょうが、ひとつには教育期間が6年から8年間に延長されたと考えることが出来ます。このように教育にかける時間と労力は増加する傾向の中で、教養教育は全国的にこの10年ほどの間に2年であったのが1年半ないし1年に短縮されてきました。新制大学の50年を考えると、教養教育にいろいろ問題があったことは多くの人の認めるところです。この間、各学問が得た専門的知識の量は年々増える一方で、限られた時間内で専門的知識を教えるために教養教育の時間を削減しようという方向に傾くのは無理のない話と思われます。教える側のみならず学生も専門の科目により関心が傾き教養教育への関心が薄れてきています。世の中が効率を追い求める傾向の中では、「教養」という言葉すら死語になりつつあります。しかし初等教育での学力の低下が認められ、そして、社会の成熟を考えると、教養教育の時間を減らすことで失うものが何かを十分に考

えてもいいように思います。本学が130年前に開校したとき、医師の必要度は極めて高いものであったでしょうが、そんな中でも、基礎的な学問の教育に時間をかけていました。

次に、医学部で数学を教えてきたことについて話したいと思います。幸いにして誰一人面と向かって「医者になるのになぜ今更数学を勉強しなければならないのか答えて欲しい。」と迫ってきた学生はいませんでした。かなりの数の学生はその疑問を思っていたのですが、学生から迫られる前に「なぜ数学を医学部で教えるのかを君達が納得するような説明は出来ない。」と、それよりなにより、自分自身、医学部での解剖の講義ほどには数学の講義の存在の明解な答は見つかりません。いささか傲慢な言い方ではありますが、「こどもに人参やピーマンをなぜ食べなければならないかを十分に納得させるのは難しい。」と、医師になるのに最小限必要な教育を考えると数学は必要ないでしょう。絵画を見ると、実に多種多様な色が使われています。それらが複雑に絡み合って素晴らしい1つの絵を作り上げてます。オーケストラは多くの楽器と多くの演奏者からなっています。1つの色が欠けたからといって、その絵が全くだめになることはないでしょう。オーケストラで1人の演奏者が欠けたからといって演奏がだめになることはないでしょう。ですから、パーツの1つ1つの必要性を問題にすることは、たぶん不毛な議論になると思います。必要性や合目的性からの議論は分かり易いのですが、真実はいつも分かり難いところにあることも忘れてはいけません。

いまは「改革なくして成長なし！」と叫ばれる時代で、本校も法人化や統合が進行しつつあります。教養教育の制度はそのような時に最も影響を受けることでしょう。多くの大学ではすでに行った教養教育の改革の問題が指摘され、さらなる変化が模索されつつあります。

次の時代を担う若者にとってより実りある方向に向かっていくことを願っています。そして、本校のより一層の発展を祈念してやみません。